

トランスナショナルな悪魔祓い

ラファエル・ショージ

——「在日ブラジル人」ネオ・ペンテコスタリズムの霊的世界——

二〇〇八年、日本のテレビ局がある恐ろしいものについて報じた。日本で「マクンバ」と呼ばれる、公共空間での生贄と供物をともしなうアフリカ系ブラジル人の魔術が滋賀県に存在するというのである。^①

番組は日本の公園で「黒魔術」(Black magic)が行われていることを、形跡や証拠から証明しようとしていた。かつて日本において、人をひきつける異国性のおもな源泉のひとつが他者であるマイノリティであったとするならば、現在ブラジル系移民もまた日本社会における他者性の源泉となっているのである。

実のところ、日本の「マクンバ」報道におけるセンサーショナリズムは、ブラジル人の多くもまた同じように持っているネガティブな感覚と恐れを反映しており、ブラジルのネオ・ペンテコステが利用するよく知られたものである。ネオ・ペンテコステ運動への改宗者の多くは救済と繁栄を求めるようになり、

彼らの多くは、他者によってなされるアフリカ系ブラジル人の宗教ないし「黒魔術」との初期の接触こそが諸悪の根源であったと理解しているのである。

実際のところ、日本において一般にはアフリカ系ブラジル人の宗教は、比較的わずかな支持のもと実行されているにすぎないようである。^② ウンバンダ・センターはあまり多くはなく、土岐市（岐阜県）のZOOのようなくつかのセンターでは、むしろ彼らの実践はより日系のスピリティズムと関わっている。^③ 在日ブラジル人の中でもある人々にとっては、マクンバは異文化を感じさせるものであり、恥ずかしいものであり、ときに嘲笑的である。一般的な感覚は、センセーショナルリズムと誤解によるものである。ユーチューブのあるコメントは、テレビに見られる「マクンバ」の明瞭に日本的なイメージを「フライドチキンを用意している」とあざ笑った。他方で、多くのブラジル人はいまだにアフリカ系ブラジル人の宗教に関わる悪霊や実践を恐れている。

興味深いことに、アフリカ系ブラジル人の霊は、ブラジルのネオ・ペンテコステ運動にとって不可欠である。というのも、彼らは健康問題、精神的混乱、悪意、そして悪魔祓いによる解決を正当化するために、悪霊に依存しているからである。ブラジルのネオ・ペンテコステリズムを移植することは、少なくともその初期段階においては、敵としてのアフリカ系ブラジル人の霊を移植することを意味するのである。

本稿のテーマは、デカセギの共同体におけるペンテコスタリズムの成長に焦点を当てつつ日本におけるブラジル人の宗教の概要を提示し、その後にはネオ・ペンテコステ運動であるユニバーサル・チャーチ・オブ・ザ・キングダム・オブ・ゴッド (UDKG) についてさらなる詳細を記述することである。おもな焦

点は日本におけるブラジル人の霊的世界を再解釈することである。この意味で、日系ブラジル人との対比の中で、「ブラジル系日本人」^④の宗教性が日本に生じていることを議論する。

日系ブラジル人のトランスナショナルな霊的世界

日系ブラジル人の霊的世界はトランスナショナルであり、ブラジルで実践される日本の宗教から日本におけるブラジルの宗教までの範囲に捉えられる宗教的グループによるところの、日本とブラジルの要素を表している。日系ブラジル人のケースでは、ブラジル人の霊的世界への多くの日本のアイデアの吸収は、文化的困難をそれほど表すことなく、驚きもなかった。そのコンベネーションは、折衷的であり、多くの要素に支えられている。日本の場合、この統合された霊的世界は神、ブッダ、その他の存在によって満たされ、ブラジルの場合、聖者とアフリカ系ブラジル人の存在は、スピリティズムの霊媒によって中次ぎされる霊と空間を分け持っているということになる。

日本の環境におけるコミュニティのあいだで、ブラジル人はカルマおよびとりわけ解決されるべき問題の源泉としての霊の影響を容易に承認する。このことの指摘は、本稿の目的にとってきわめて重要である。カルマの歴史を分析するとき、日本の一般的宗教性と新宗教運動へと定着する以前、ヒンドゥーによる再解釈に端を発し、儒教の影響を受けつつ極東へと向かった概念の伝播が見いだされるだろう。^⑤しかしながら、ブラジルにおけるカルマへの適応を分析すると、カルマの概念はフランスのスピリティズムの発展におけるアラン・カルデックによるその流通を通して西洋に伝わったことが見出される。ブ

ラジルにおいてスピリティズムがきわめて多くの信奉者を得ていたときに、ヨーロッパでは逆に量的に重要ではない宗教となった事実は、宗教にさまざまな拡散と受容の仕方を表させる歴史の奇妙さの一例となっている。

日本人の先祖崇拜は仏教からは独立しており、その役割は現世における利益と悪霊祓いに関連していると理解されうる。⁶ 霊的世界との関係性は、つねに子孫に影響を与える先祖を通して頻繁に起こる。先祖への義務に関わる不幸や暴力的死や怠慢は、現世へのネガティブな結果をもたらす。霊的世界に向けた実践や儀式によって利益がもたらされることは、現世におけるそれらの効果としての報酬と考えられているのである。そのようにして、先祖の霊的地位を上げることにより、いまの信奉者の地位もまたおなじように向上する。こうした標準的な考え方は、問題の原因に関するものとして新宗教についても頻繁に指摘される。その解決策はグループによって多様で、経や真言を唱えるような素人の方法による儀式のパフォーマンスによるものである。正しい実践は霊的世界との関係をつくりだす。それは信奉者のいまある暮らしにおける現実の利益を表し、問題の解決へと導くのである。

前山隆は日系ブラジル人における先祖崇拜の再解釈について分析している。彼が述べるように、日本人によって伝統的に培われてきた先祖崇拜や死後の世界は、戦後一九五〇年代より始まる日本宗教の創立のプロセスにおける、ブラジルにおける移住者によって部分的に回復された。移住者は、生きた先祖として自身を参照し、日本で成立した日本の家族の起源を見出した。それはとりわけ日本仏教の内部において、彼らの先祖との関わりを深め、自身を新たな創始者として定義することを目的としている（前山、一九七二年）。

多くの日本人やカトリシズムの末裔の改宗によって、日系ブラジル人のあいだでの先祖の役割は非常に弱くなった。だが、スピリティストの霊媒やカルマとの関係に結びつけられ、依然として存在している。実際、個人のカルマの概念は先祖より引き継がれたものであり、欧米の西洋人には容易に受け入れがたいものだが、多くの日本宗教に現存し日系ブラジル人にも受け入れられている。先祖の宗教的重要性はまた多くのブラジル人にとっても受け入れ得るものである。霊的世界観における先祖の編入にも関わらず、スピリティズムからウンバンダにいたる連続性は可能になっている。ウンバンダに見られるバンツー族のエスニック・グループによる先祖と霊への礼拝の「白い」合併において、スピリティズムはすでにその役割を果たしている。ブラジルの宗教におけるカルマの進展や、霊の影響の概念の存在を得て、先祖の影響は信憑性と一貫性を表す。身体的・感情的病気をもたらず世襲的要素の影響はまた、精神的継承ともなっている。

日本的宗教性とブラジル人の宗教的宇宙との融合は、混成的な霊的世界の合併と発展を可能にした。ここでは頻繁に混ぜ合わされる神々と実践の世界に、ブラジルのおよび日本の意味が加えられる。⁸二十世紀における田舎の移住者の根絶を招いた都市への移民の増加のなかで、ブラジル人の宗教の領域は急激な変容の段階に入った。このことは、日系コミュニティのルーツに対する日本宗教の移植を可能にし、それらのいくつかはブラジル人の間で多くの共感者や改宗者を惹きつけた。こうした文脈において、ブラジルにおけるいくつかの日本宗教の運動が進展した基本的要因は、利益の追求を通じたこの日系ブラジル人たちの宗教性であった。⁹

本稿の文脈において、この世界での利益の追求におけるこの融合は、「ブラジル系日本人」のペンテコ

スタリズムの勃興のインパクトを分析することによって明らかになるだろう。多くのブラジル人（多くは日系ブラジル人）の、臨時労働者としての日本への移住者は、トランスナショナルな様式のネオ・ペンテコスタリズム（ブラジル人の新宗教）を促進したのである。

日本におけるブラジル人の宗教

「デカセギ」現象として一般に知られるブラジル人移民の日本への流入は、日本とブラジルの間での移民におけるもつとも新しい段階として見ることができる。三つのおもな移民の波として、一、第二次世界大戦前の日本からブラジル、二、第二次世界大戦後の日本からブラジル、そして三、一九九〇年以降のブラジルから日本が挙げられる。それらは単に連続的な日本とブラジルの間の移民の流れとしてだけでなく、日本への移民が日本人の子孫（第三世代にいたる）やその配偶者の人々へのみ許容されていることによって結びついているのである。これは一九九〇年の日本の移民法改正後に可能となった。量的な表れとしては、数十年の間にブラジルに移民した日本人の数（約二十四万二千人）は、一九九〇年代と二〇〇〇年代の間に日本に移民した「ニッケイ」とブラジル人の数（二〇〇五年の人数は約三十万人）よりも少ないと見られている。現在では二〇〇八年に強まったグローバルな経済危機と、日本政府によるデカセギの帰国に向けた財政上の刺激策によって、多くのデカセギのブラジルへの帰国が見られるようになった（二〇〇一年より、日本における多くのブラジル人約二十三万人が支援を受けたが、どれだけのデカセギがブラジルに帰国したかを明確に知ることはきわめて困難である）。

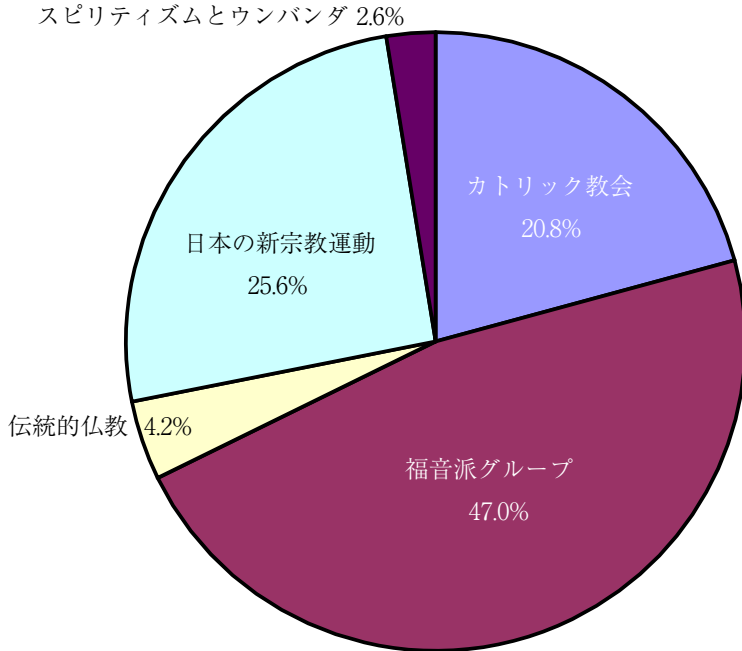


図1. ポルトガル語でブラジル人に対して行われる礼拝の場の比例数にもとづく比較。調査は二〇〇七年から二〇〇八年に行われた。出版物やウェブサイトから供給された資料にもとづいており、日本におけるブラジル人向け新聞や雑誌によって補足されている。

一九九〇年代に進められた人類学的研究は、ブラジルの日系のあいだで強く見られるような日本の民族的遺産の価値回復よりもむしろ集団のブラジル人アイデンティティを強調するために、日本のデカセギの傾向性を補強した (Tsuda, 二〇〇三年、Linger, 二〇〇一年、Roth, 二〇〇二年)。今現在では、日本とブラジル双方の経済的要因に即した日本における家族のあり方によって認識が変わっているにもかかわらず、大多数のデカセギは移民を一時的なものと考えていた。デカセギの運動はすでに二十年近く経っており、より定常的な移民のプロセスないしブラジルへの帰国のいずれかへとゆるやかに取っ

て代わられつつある^⑩。帰国はとりわけグローバルな経済危機に端を発した自動車や電機産業の収縮、な
らびに二〇一一年の東北地方の大震災の結果として生じたものである。とどまることを選んだ人々にと
っては、動向は決定的な定着に見える。それは長期の支払いによる家の購入、ブラジルへの低下する送
金、日本の学校における児童や青少年の教育、そしてより決定的なコミュニティの構造の樹立をともなす。
臨時雇用への期待よりむしろ固定的な移住の可能性は、とりわけブラジル人移民が国の中でほぼ合法で
あるという事実によって可能になった^⑪。実際、二〇〇八年すでに約八万人のブラジル人が日本の永住権
を取得している。

二〇〇七年から二〇〇八年のあいだにポルトガル語の礼拝を行った教会と寺院の量的調査は、日本の
ブラジル人における福音派グループの注目すべき数を表している（図二）。日本においてそれらはポルト
ガル語で宗教的礼拝を行なう場において多数派を占めているように見える。

図の資料は、ブラジル人コミュニティにおける福音派におけるおもな流れとして、デカセギたちの主
流の傾向がペンテコステ派運動への改宗だとする見方を補強するものである。ある研究者によれば、そ
れ以外の傾向として日本の新宗教における日系のための布教活動の存在があり、それらは折衷の傾向や
先祖崇拜の回復を促進した（Matsue, 二〇〇六年）。

「ブラジル系日本人」ペンテコスタリズムの出現

「ブラジル系日本人」ペンテコスタリズムには2つのおもな流れがある。一、日本においてデカセギ自

らによって始められた教会、および二、ネオ・ペンテコステ運動である。

一つ目のものは、デカセギの牧師をともなつて現れた教会として見出されるものである。それは、とくに日本人の先祖をともなわない混血やブラジル人のあいだで生じており、いくつかはブラジルにおけるペンテコステ派教会とのつながりを確立させた。それら独立した教会の例として、『Missão Apoio』(布教支援)と Igreja Missionária do Deus Vivo (生きてゐる神の宣教師教会)がある。日本においてデカセギによって設立された教会のなかには、ブラジルのいくつかのアッセンブリーズ・オブ・ゴッドとのつながりをもつものも多い。カトリシズムが、ブラジル人の宗教としてポルトガル語での礼拝をするものとして自らを強調するのが難しくなつたことで、ペンテコステ派のグループは現にある要求へと最適化された教会や、牧師としてのデカセギ自身として、エスニックな社会的ネットワークへと効果的に広がつていった。ペンテコスタリズムは日本におけるほかの制度によっては提供されて来なかつた社会的役割を果たした。それは援助のネットワークを用いることや、日本でブラジル人移民がこうむっている危機的状况への対処の仕方としての福音派への改宗を勧めることによるものである。デカセギのあいだで創出されたこれらの教会はいま現在、布教と元デカセギの人々を通してブラジルへと拡張し、帰還している (Shoji, 2008年)。

第二の波は、Igreja Universal do Reino de Deus (ユニバーサル・チャーチ・オブ・ザ・キングダム・オブ・ゴッド、UCKG) および Igreja Internacional da Graça (インターナショナル・チャーチ・オブ・グレイス) など、ブラジル人のネオペンテコステ派運動の出現である。ブラジルにおいて、繁栄の神学と悪魔祓いは、ネオペンテコステ派教会の活動を他のグループから区別するおもな特徴となつている (Org, 2003年、

二〇〇六年、Chesnut, 二〇〇三年)。

ブラジルにおけるネオペンテコスタリズムの考え方は、土着的なペンテコステ派運動の新たな拡張と関わり合っている。ブラジルにおいて、一九六〇年代にはじまる都市化と近代化の強い傾向は、ブラジルにおける宗教市場の再組織化につながる変化をもたらした。多くの新しい宗教グループは、移民のプロセスと急激な社会変化において自身を確立した。それは、しばしば田舎のカトリシズムの典型である礼拝の場を占領した。迫害の時期が終わったのち、ウンバンダ (Umbanda) とカンドンブレ (Candomblé) はブラジル人宗教の領域の進展する多様化において呈示され可視化されるようになってきた。移住は一九八〇年代における新しいペンテコステ派のネットワークの確立とネオペンテコスタリズムの出現に向けた駆動力となっていたのである。世界キリスト教徒データベースによれば、今日、アメリカにおける約六百万人のペンテコステ派に比してブラジルでは二千四百万人におよぶ最大のペンテコステ派人口を擁している。

ネオペンテコステ派の教会 (もつともよく知られているのは「ユニバーサル・チャーチ・オブ・ザ・キングダム・オブ・ゴッド」^①、「ゴッド・イズ・ラブ」、そして「インターナショナル・チャーチ・オブ・グレイス」) は、強烈かつシステマティックなメディアを使用したプロセスから利益を得た宗教的供給者であった。このプロセスは現世における恩恵や治癒の受益にもとづく活発な布教をしばしば表わし、ある場合においてはアフリカ系ブラジル人の宗教の悪魔化を広めた (とりわけユニバーサル・チャーチ・オブ・ザ・キングダム・オブ・ゴッド)。「宗教的礼拝」の空間を提供し、世俗的利益を求める人々の市場へと明確に照準を合わせ、これらのネオペンテコステ運動は、ブラジル社会の最も貧困なセクター

における個人的表出にとつての必要を満たしているように見える。それはまた公共的領域の抑圧やグループ外での政治的関心をも伴っている (Pierucci and Prandi, 一九九六年、一三三～三四頁)。他のペンテコステ派グループとの重要な違いとして、DCKG のようなネオペンテコステ派は自ら組織化した小組織や共同体の代わりに、強力で統制された教会への改宗のための多国籍メディアに触発されたモデルとして表れたことが挙げられるだろう。

ブラジルにおけるネオペンテコステ派の教会は日本のデカセギに対する活動に多くを投資し、グローバルな構造とブラジルの明確な参照のなかで、日本のブラジル人への布教の先にアジアにおける経営への拡大を探っていた。エディール・マセドや R・R・ソアレスら人気あるリーダーたちは、それぞれ DCKG とインターナショナル・チャーチ・オブ・グレイスのリーダーであるが、彼らは頻繁に日本を訪問し大勢の信者と会っている。

ブラジル人のネオペンテコスタリズム、とりわけユニバーサル・チャーチ・オブ・ザ・キングダム・オブ・ゴッドのトランスナショナルリゼーションについてはいくつかの研究があるが (Oto, 二〇〇四年、Freston, 一九九九年、二〇〇一年)、アジアにおいてブラジル人のネオペンテコスタリズムの拡大はいまだ知られていない。日本においてブラジルの強力な支援を得て以来、デカセギのあいだで現れた教会に比べてネオペンテコステ派運動はより強化され、日本の経済状況にそれほど依存的でもなくなった。これらのネオペンテコステ派教会は、ブラジルで見出されたものに似た役割を日本において果たす方向を探った。それは金銭をめぐる論争的関係性の場であり、霊やアフリカ系ブラジル人の神々の排除を頻繁にともなう物質的な利益や治癒や奇跡の代わりとなる高額の十分の一税が期待される場であった。



名古屋の UCKG の寺院



地下鉄築地駅の広告

UCKG は一九九五年に日本での経営をまずは群馬と埼玉からはじめた。二〇一二年一月には一八の教会および、とくにデカセギ向けの内容の企画を含むテレビ局 (TV Record Japão)、『新聞 (‘Jornal do Brasil,’ 英語で ‘Brazil Times’)』¹⁸⁾、そしてデカセギ向けに作られたニュースを含む雑誌を持っていた。中心となる教会は浜松 (静岡県) にある。静岡県 (三教会) の他に、おもな地方の拠点は愛知県 (三教会)、および神奈川県と岐阜県 (それぞれ二教会) である。日本人の改宗者は少なく、二〇一一年五月にヒデアキ・テラウチがはじめての日本人の UCKG の牧師として神聖化された。

日本における UCKG の再解釈

他の国際的なコンテキスト同様、日本におけるネオペンテコスタリズムにもまた、デカセギのあいだでのその信憑性のための修正を見ることができるといえる。たしかに日本における繁栄の神学からのカリスマティックな生産物は、ブラジルへの帰還を願う人々にとってより強い信憑性を持っている。この傾向は日本におけるこれらの教会の真の意味における矛盾を示しており、デカセギのためのこれら生産物の再公式化は、日本のコンテキストにおけるネオペンテコステ派教会のおもだった挑戦のひとつなのである。

繁栄の神学の信憑性

繁栄の神学は一見すると、宗教市場のなかでの合理的選択のコンテキストにおける、きわめて合理的なデカセギへのアピールとなつている。結局のところ、デカセギが日本にいるのはなによりもまずブラ

ジルに帰国したさいの財産やビジネスに用いるために金をできるだけ多く貯蓄するためにすぎない。しかしながら、繁栄の神学によって約束される豊かになることへの期待は、臨時雇用の労働者としての現実の仕事や日本におけるブラジル人の限界へ相対するものとなった。

実際のところ、デカセギのゴールは多くの場合、最終的な負債を精算しブラジルで事業をはじめた金を貯蓄することである。日本に留まりたい人々は、従業員を続けることが期待されている。彼らは安定性を高めたいが、一方で日本における自身の事業、ないしはブラジルの DCKG の信奉者へ約束されたような仕方でも豊かになる夢を、まれに抱いていた。エスニック・コミュニティ内の事業においては、ブラジル人のためのエスニックな商店を営んでいるゆえに消費者の市場は相対的に限定的であり、日本人としての彼らのあいだでは非常に熾烈な競争が存在する。これに対し、ブラジル人コミュニティが決定的な定着段階にあり、家族や第二世代の教育が金銭に取って代わるコミュニティの優先事項だと当然に思っていたそのとき、経済的沈滞はすみやかに豊かになることへのすべての可能性に対する妨害となっている。こうした状況において、豊かになることに焦点をあてた繁栄の神学は、日本に定着しているブラジル人に向けた信憑性としてはきわめて脆いものとなっている。

ネオペンテコステ派教会の寄付の論理は、デカセギのケースにおいても違うように見える。デカセギは時給に基づいた月給を得ているが、計画された期間のちブラジルへと戻るための資本を蓄積するという彼らの目標を達成するうえで、安定した経済が鍵である。牧師から高い寄付がしばしば要求されるが、それに対する反応はブラジルよりも目に見えて低い。名古屋の DCKG で私が参加したような「ビジネス事業家」のカルトや「経済的成功のカルト」においても謙虚な額（千円程度）であり、寄付に対す

る関心を自発的に示している人はわずかである。寄付は実際未来の富として還元される犠牲であり神の試練であるという説教は、私のエスノグラフィックな観察のなかではとくに成功していない。事業確立の成功を目指す人々に向けてつくりだされた、もたらされる繁栄や豊かになることとして聖化された物体を使用するような呪術実践は、部分的に受け入れられているのみである。多数の参加者にも関わらず、ブラジルに比べて自発的な寄付はわずかである。

日本での経済的成功を約束する DOGG カルトのフィールド調査のための滞在の文脈において、私は繁栄をめぐる生きた証言の相対的な不在を見て取った。それらがブラジルで記録された発言、または日本人の事業家の例などによって置き換えられたとしても、熱心な反応を刺激することはない。ある牧師がヤマハ創業者の例を詳細に取り上げた。第二次世界大戦直後のヤマハ発動機の歴史を参照し、創業者が「自転車にモーターを取りつける狂ったアイデア」を持っていたという。そして「暗黒の子供(非キリスト教徒)は、光の子供(DOGGの信者)よりも幸運である」、というのも後者よりも大胆さに欠けるからだというのである。ほかの場合では、ブラジルにおける DOGG の証言が選ばれ、ビデオが流された。それは DOGG に対する多額の寄付によって貧困と家族の問題が消え去り、直後には非常に大きな事業の成功がもたらされたというものであった。

日本におけるブラジル人のリアルな生活について、これらの記述はわずかしか得るところがないゆえに、DOGG は日本で豊かになることの生きた証言に関するやや積極的な補強を示している。ほとんどの改宗者が言えるのはただ家や車を買ったことなど、多くは長期ローンや古い家の修復をとまなうゆえに、なにか特別なこととして解釈されることはまれな発言のみである。

この動向は DCKG に対する課題をもたらした。なぜなら繁栄の神学の概要が、日本における信者の拠点に留まったり、教会へ経済的な寄与したりするつもりがないようなブラジル人を引きつけるものだからである。二〇〇八年一月、日本の DCKG によって行われたウェブサイトの調査のデータによると、EJ 名の回答者のうち、約 54% がブラジルへの帰国を考えており、日本に残り定住を望む人は 5% にすぎない。こうしたデータが統計学的方法をもたないにせよ、このときに日本の DCKG に属する人々のなかでブラジルへの帰国を望む人が大多数であることは如実に示されている。

以上をまとめると、繁栄の神学に約束される向上はブラジルへの帰国を望む人々にとつての、より大きな信憑性を示している。それはおそらく、教会コミュニティを構成しつつ日本への定住を望む人々とは反対の、デカセギのおもな目標と調和した合理的選択を反映している。日本の環境における事業活動の成功の意味におけるデカセギの困難によつて、繁栄の神学のメッセージは、日本の教会の放棄とブラジルへの帰還を意味した。さらにこれらのケースにおいて、高額を寄付する傾向性はすなわちデカセギの目標に対立するものだが、それは彼らが日本にいる間はできるかぎり金を節約することを追求しているからなのである。

スピリチュアル・ヒーリングとしての家族のセラピー

日本において豊かになることの可能性が乏しいとしても、ブラジル人の標準として考えられる貧困は二〇〇八年まではデカセギに影響しなかった。それよりも重要な問題としては、多くの家族が言語、世代、

都市、そして仕事の長い旅によって離散してしまったことである。日本におけるブラジル人家族、とりわけ移住してきた若い人々の決定的な定着の動向にともない、繁栄と家族とのバランスが得られなければならなかった。

週末をも含めた残業への集中、および住居の定期的な変化は、若者の犯罪、家族の不和、そして子供の教育への低い優先度につながる多くの問題を引き起こした。何年かのち、デカセギのコミュニティはなにを優先すべきか再考し、出自においてのみ維持されていたような価値を取り戻すことを迫られるようになった。ブラジル文化の価値観では、社会的結合において最も重要なものは家族であるとみなされていた。臨時の滞在が定住になることで、日本における調和的家族の創造は、差別撤廃や子供の教育とならんで重要な関心事となった。

おそらくこうした理由によって、ネオペンテコステ派教会の強調するものは、家族の断絶、健康問題、そして感情的ストレスの解決として、より自然に表現されるようになっていった。このとき以来、日本における雑誌や出版物によく表現されるスローガンは、「成功は決して家族に関する失敗を正当化できない」というものであった。カルトの実践を行なうことや、彼ら自身の改宗についての報告に基づいた布教の利点は、グループが自然に拡張へむけた方向性を見出すことにあった。というのも、グループの発展がたんにソーシャル・ネットワークの存在という意味においてだけでなく、新たな改宗や奇跡の持続的かつ公共的普及による神学の文脈化におけるものでもあるからだ。公衆の証言それ自体が、牧師のメッセージや草の根から発生する神学へと調整される。より一般的な道筋が存在するとしても、最も共通してみられるケースや動機は、もともと宣伝され、より多くの人々を引きつけるものである。グループ

は宗教市場が提供しているものへの最適化への方向性を見出し、市場が要請するものへのさらなる強調を準備しつつ、最も数値的な関連を持つ観衆に向けて成長する。

家族のセラピーを行なう期間は、ブラジルにいる人を含めた家族のメンバーのための牧師による祈りと祝福を中心としている。これらの実践のうちのひとつは、家族写真を含むパネルのペンテコステ派の祝福を含んでいる。日本の DCKG は、メディア部門がブラジル人のニュースのチャンネルとなることを目指すなかで、結婚、精神疾患の治療と愛の幸福などのテーマの強調に努め、ヒーリングやブラジル人の家族の価値の普及により重きを置いてきた。

霊的闘争の再配置——日本におけるアフリカ系ブラジル人の霊に対する悪魔祓い

DCKG における「デスカレゴ」¹⁴の集会は通常金曜日に開かれる。この日はウンバンダの宗教的礼拝ないし「マクンバ」¹⁵のようなその他関連した魔術実践を行なう、アフリカ系ブラジル人の宗教の祭祀者によって一般に用いられている。ブラジルにおいて「デスカレゴ」の集会は霊に対する聖なる戦いを表すこの日に確実に行われ、日本においてもこの集会の実践はやはりこの平日に行われている。

アフリカ系ブラジル人の神々に対する悪魔祓いは、DCKG のネオペンテコステ派において広く行われており、とりわけ浜松の主な寺院が挙げられる。現在少なくともそれらは日本におけるネオペンテコステ派の悪魔祓いのおもなものとして維持されている。DCKG における悪魔とそのアフリカ系ブラジル人の悪霊は、ブラジル人のネオペンテコステ派の世界観と悪魔祓いの実践においてきわめて重要である。この

意味において、ネオペンテコステ派の宗教はアフリカ系ブラジル人の宗教以上に、日本におけるブラジル人の集合的記憶におけるアフリカ系ブラジル人の神々を保存しているように見える（きわめて奇妙ではあるが）。

このことは同時に、日本という場における浄化と悪魔祓いが、アフリカ系ブラジル人の神々によって用いられうることを含意している。寺院における取り憑かれた者の悪魔祓いの儀式では、日本の場の浄化が同時になされる。二〇一二年における十三日の金曜日は、日本のすべての DOKU 寺院における「デスカレゴ」の集会の特別シリーズとなった。ある牧師の説明では、この日は「悪のチャンネルが開き、多くが悪の魔法やマクンバを行なう」という。浜松では、これらの集会はとくに、週間にわたって開かれる。三つの集会は十三日の金曜に開かれ、おもなものは午後八時に始まった。到着すると、私は多くの補助の牧師が、いくつかの縄の鞭を手に動きはじめるのに気づいた。彼らは、それぞれ二人組からなる、七つのグループがいる七つの場所へ行った。悪霊祓いがなされる場所は以下のとおりである。一・浜辺（海）、二・川、三・滝、四・交差点、五・鉄道、六・出口のない（行き止まり）街、七・墓地。寺院において悪魔祓いの集会が行われているあいだ、補助の牧師はこれらの場所での「強い祈り」を捧げる。霊の所業を封じ込め、それらを祓うために呼び寄せようと床を鞭で打つ。そうして霊が教会の改宗者の生活に対してこれ以上の影響を与えないようにするのである。

この特別な集会ではすべての参加者が8回、自分の名を記入する紙を受け取る。一枚は代わりのために置いておき、ほかの七枚は上に示した場所へ行くために補助の牧師へと渡される。そこで悪の力が呼び出され祓われるのである。「デスマンチエ」¹⁶の儀礼は、私が参加した他のもの（とりわけ名古屋の）と

は異なっている。ここでは、取り憑かれた人は数多く、そのうちの多くが声の変質と操作できない身体による取り憑かれた合図とともに感情的な高ぶりを示した。さらにまた私はアフリカ系ブラジル人の神々の例を見出した。特に憑霊として存在していることが確認されたある実体が「トランカ・ルアス [Trancarus]¹⁷」である（五回）。集会のはじめに牧師がその働きについて言及し、それが幸福、繁栄、および健康への道に近い存在であることを強調するが、とくにそのために表出されるものと考えられる。補助の牧師が上に述べた儀式の場所から戻ると、彼らは強い祈祷と鞭の使用によって悪霊が燃やされているのを感じたと主張する。その何人かは雑音が生じたために恐れを感じていたが、たとえ警察が呼ばれたとしても、あらゆる状況にかかわらずこの霊的闘争を続けることを宣言した。

日本で悪魔祓いの場をもつ結社の方向性は、そのような場がアフリカ系ブラジル人の宗教と、それが自らの儀礼に気づく機会に寄与するという役割に関わっている。ネオペンテコステ派は、ブラジルのウンバンドの祭司に用いられるような日本の場所を、象徴的に征服することを試みている。さらにはシナイ山への牧師の巡礼に先立って、浜松付近の山においてもまた祈祷の集会が開かれている。山の場合、これらの場所の役割はまだまだ不透明だが、今後日本の宗教との対立の可能性を排除することはできないと考えられる。

肉体から離れた霊と先祖の呪い

ネオペンテコスタリズムが、日本においてローカルな観念のなかで持続性をもつ要素こそが悪の根源

だと考えていることを示すいくつかの指標がある。DCKGの発言では、悪の根源はしばしば肉体から離れた霊ないし先祖の呪いであり、それは敬虔な信者を迫害するとされる。この発言は両義的である。というのも、死んだ靈魂や先祖の呪いは悪の根源であるという主張は、ブラジル人のスピリティズムと日本的世界観とが交差する領域にとどまっているからである。

「東洋の宗教」に対抗するより一般的な傾向が、しばしばペンテコステ派の説教に表れる。私が行った刈谷におけるインターナショナル・チャーチ・オブ・グレイスの調査によれば、例えばペンテコステ派の牧師は勧誘するさいに「悪の目、羨望、黒魔術、東洋の魔術に対抗せよ」と述べた。しかしこれまでのところ、この方針に決定的な再解釈は与えられていないように見える。こうした方針の採用は、ネオペンテコステ派がこれまで避けようと案じていた日本社会での無数のコンフリクトを惹起しうるだろう。したがって他の集団に対抗するような論争的な実践としての悪魔祓いは、日本の多数派の社会を考慮すればきわめて不毛なものに見えるのである。

事実、ブラジルにおけるネオペンテコステ派との関係に存在し、とりわけDCKG周辺に係わる潜在的な論争を軽視することはできない。他の国における拡大のなかで生じたいくつかの論争のあとにも関わらず、DCKGは日本においてはより論争的でない状態であることを決意しているように見える。いまに至るまでDCKGは日本においてわずかな注意しか喚起していない。というのも高額の寄付の強調はデカセギのみに向けたものであり、エスニック・コミュニティにおいて教会の伸展は制限されているからである。これまでDCKGが引きつけた日本人は非常に数少なく、そのやり方に対するわずかな注意しか得ていないように見える。DCKGの牧師との個人的な会話によれば、日本宗教は自然崇拜的かつ自然の神聖視だと

批判されているが、このアイデアが広まることは注意深く避けられている。日本についてのコメントではしばしば千年王国論の形式について述べられる。地震と津波は破壊についての聖書の合図であり、世界の終りが近いことの兆候だというものである。さらに私が集会で受け取った牧師のサインが入った手紙では、世界の終わりが近いことや改宗の必要性を主張していた。その一方で、牧師は日本の経済のために祈り、聖書のシナイ山になぞらえられた巡礼では、日本の国旗が持ち込まれた。

しかしながら、この新しいコンテキストにおけるブラジル人の霊の信憑性への疑問のゆえに、DICKの慎重さも再解釈の必要性を妨げていない。名古屋でのDICKの「デスカレゴ」の集会に参加した日に、最も共通して見られたのは、「*rituais de magia negra* (黒魔術の儀式)」、「*espíritos desencarnados* (肉体を離れた霊)」、そしてとりわけ「*Encoστο encosto*」⁽⁸⁾といったより包括的な用語であった。ブラジルではしばしば用いられ、頻繁に引用されるもうひとつの表現は、全てのものは「*amarrado*」(つながっている)ように見えるというものである。すなわち、すぐれた者が成功を得るよういくら試みたとしても未来は失敗をもたらす不運なものに見えるが、それは打ち壊されるべき力強い否定的な霊的力によるものだ、という意味を含む表現である。

「デスカレゴ」の儀礼は、標準的なパターンにしたがっている。悪の霊や悪魔の一般的な説明、および観衆の生活におけるそれらの行為の結果の呈示の後、牧師が神の名において悪魔自身がかかれ、呪縛と呪いが打ち壊されることを主張する。「デスカレゴ」それ自身が、牧師とアシスタント(ポルトガル語で「*obreiros*」)によって組み上げられた地下道を通じて、敬虔な信者たちの歩みにおける絶頂へと達する。牧師とアシスタントは神の炎の力によって悪のエネルギーを追い払うために、手を合わせて神の名に訴

えかける。DCKGのメンバーはおもだった牧師から個人的に悪魔祓いをしてもらうためにときおり列をなしている。

「デスカレゴ」のある集会では、そのおもなテーマはとくに日本における悪魔であった。DCKGの牧師は新たに日本へやってきた者だったが、説教に表された彼の認識は、他の日本のDCKGの牧師のあいだでもほとんど異論がないようにみえた。日本における悪魔の仕業のおもな違いのひとつは、この国においては悪魔がより「心」に焦点を当てて行っているということを彼らは強調していた。操作不能の身体による明確なサインをとまなう憑霊がブラジルのDCKGにおいて一般的だと私たちが考えるなら、その特徴づけは便利なものである。悪魔が心において優勢にはたらくという事実は、日本において取り憑かれた者の外的行動の相違を正当化するのである。

しかしながら牧師は、心のなかの悪魔の働きは、狂気、絶望、そして自殺へと導くとする説教をつくり出した。移民のプロセスからときおり生じる社会的孤立は、移民コミュニティの多くを精神的混乱、家族問題、アルコールやほかのドラッグの乱用の犠牲者にしてしまう。さらには、移民コミュニティに対して牧師が強調するように、日本は自殺の多い国となっている。日本人は物質的幸福の意味において賞賛すべき人々とみなされるが、一方で幸福や無上の喜びが欠如しており、しばしば絶望や自殺といった精神的問題の犠牲者とみなされている。日本における悪魔の顕著な働きは、そのおもな原因のひとつとなりうるのである。

ネオペンテコステ派の説教においてパターンが確立されるにつれて、肉体を離れた邪悪な霊もまた、精神的苦痛の原因として重要な部分を占めるようになる。牧師は、例えば声を聞いたり形を見たりとい

った説明できない現象は、日本におけるブラジル人においてはより顕著であることを警告している。これら肉体を離れた霊のはたらきは、日本における精神的苦痛の原因として示されているのである。

近年、邪悪についての説明のつぎに生じてきているパターンとしてまた目立ってきているのは、先祖の呪いとしての邪悪の再解釈である。ここでは苦しみの可能性はおそらく精神または身体である。実際、多くの健康問題（身体的または精神的）が遺伝的な原因に帰されると、この解釈を *DOCK* の熟達者たちは霊的世界へと拡張する。このタイプの発言は日本で頻繁に見られるにも関わらず、ブラジルにおける福音派のサークルでもときおり議論され、しばしば神学的な解釈や大衆的論争を巻き起こす。ニッケイのトランスナショナルな世界は先祖の観念の自然な持続を表しており、この解釈を補強する。スピリテイストの連続体を構成する宗教は、このトランスナショナルな霊的世界の拡張の可能性を暗示している。それは、現世における人々に影響しつつ、とりわけ先祖崇拜のいくつかの特徴（とりわけ日本の新宗教運動に関わるデカセギの人々のあいだでの）から、先祖の呪いの悪魔祓い（ブラジル人のネオペンテコステ派）までにおよぶ反応を生み出した。*DOCK* のメンバーのあいだで、先祖の呪いの観念は、おそらく強められた。というのもこれらの発言は、さまざまな機会で繰り返され、祓われるべき敵による肉体への制度的な取り憑きを奨励するパターンを作り出したからである。

最終考察——「新環境への順応」とブラジル人のネオペンテコステ派による移植方針

本稿では、ネオペンテコステ派のグループ *DOCK* に焦点を当て、日本における新しいペンテコステ派の

運動、およびトランスナショナルな霊的世界の出現に対する新しい理論的なヒントを示してきた。すでに述べたように、ブラジル人のペンテコスタリズムへの参入は、デカセギのあいだで大きく増加している。ブラジル人のネオペンテコステ派の世界観は、とりわけ戦うべき敵の存在と悪のつじつま合わせに依存しており、それはアフリカ系ブラジル人の特徴をもつものとしてしばしば象徴化されている。こうしたすべての霊的闘争はまた日本の風景へと移植されている。この日系ブラジル人における日本とブラジルの要素のコンビネーションの可能性は、いくつかの一般的特徴によって生じたものである。アフリカ系ブラジル人の宗教の世界観を含みつつもそれに限定されないブラジル人の霊的世界において表れる霊の代わりに、日本ではこの霊的世界は、日本のコンテクストにおける自然なコミュニティを表すニッケイの特徴を帯びる傾向をもつが、それが多くの日本人改宗者を引きつけるにはまだ不十分である。

生起しつつあるグローバルな市場のパターンに即している「ブラジル系日本人」のネオペンテコステ派は、ペンテコステ派教会（聖霊の象徴を中核とする）と霊的世界（通常聖霊を含まない精霊を信仰し、自然や土着宗教、たとえばシャーマニズムや多くの新宗教運動をも含む形式の多様性を提示する）との友好的関係性を探り強化している人々とのあいだに論争を巻き起こしている。東アジアのコンテクストを鑑みると、他の地域におけるこのパターンを検討するのは興味深い。とくに、土着のキリスト教徒運動や日本の韓国人教会との比較は、日本のキリスト教におけるブラジル人のペンテコスタリズムの進展を観察する上で重要になるだろう。¹⁹

グローバリゼーションの出現とトランスナショナルリゼーションの果実である種々の日系ブラジル人の宗教のコンテクストを取り上げ、それらのパターンを分析してきた。霊の「トランスナショナルリゼーシ

「ヨン」は、現象学的理解においてはほとんど普遍的なカテゴリーとしての霊を基盤としている。この視点からすると、私たちはブラジル人のネオペンテコスタリズムとシャーマニズムの場合における文化変容、文化受容、土着化、そしてトランスカルチュラリズムの概念を再び検討する必要がある。それはヴィヴェイロス・デ・カストロのような人類学者によって提案されたような、シャーマニズムや自然と文化の概念の新しい理解を受け入れるとすればなおさらのことである。²⁰ 自然は宗教の移植においてはしばしば軽視される。土着性とシャーマニスティックな宗教が結びつけられた宗教は、仮にそれらが互いに向き合う敵同士だとしても、一次的に（文化間において）トランスカルチュラルなものとして見るべきではない。²¹ シャーマニズムと自然宗教の霊的世界は一次的に文化変容に依存するのではなく、他の地理的風景への「新環境への順応」に依存するのである。

ブラジル人のネオペンテコスタリズムのグローバリゼーションは、シャーマニスティックないし土着的な多くの宗教により構成される超自然的世界とペンテコステ派の文化との遭遇を示している。ブラジル人のネオペンテコスタリズムは、多様な霊的世界を否定することはない。それら霊的世界は、さまざまな地理的場所と、憑霊や邪悪の働きを通じた自然世界におけるその効果とが結びつけられたものである。実のところ通常は、聖霊と悪魔祓いの優越を基盤としたほとんどグローバルな文化を用いて、これら多様な霊と戦うのである。

現代科学と社会科学においては、私たちは伝統的にひとつの自然と多様な文化を想定し、多くの西欧社会における公共政策としての多文化主義を称揚してきたが、ペンテコスタリズムの場合においては、グローバルなペンテコスタリズム文化が種々のシャーマニスティックな宗教と衝突したとみなすのがよ

り適切と考える。これらの宗教はローカルな自然的風景とアニミスティックな霊に支えられており、様々な形を通して自らを表わす。それらはとりわけラテン・アメリカやアフリカの場合におけるように、ペンテコステ派が悪魔の力や呪いの源泉とみなす憑霊や魔術を含んでいる。ローカルな霊によって表れる邪悪を基盤とするようなペンテコスタリズムのトランスナショナルな場合、トランスを通して拡張する必要がある。生じつつあるグローバルなペンテコステ派の考え方は、新たな自然的風景を霊的闘争へともたらし、自然崇拜や憑霊を敵と再解釈しているのである。

ペンテコスタリズムはそのようにして文化的持続性と自然的断絶のいずれをも強調し、必要となる共通のパターンを確立した。しかしまたそれは新宗教運動の成功に対する緊張もはらんでいた。そのさいペンテコスタリズムは、とりわけ土着的宗教がきわめて特殊な自然を基盤としていたり国家宗教であったりする場合、エスノセントリズムに結びついた障壁に向き合うことになる。多文化主義が西欧社会に特有の自然と多様な文化のビジョンの結果として、多くの文化の友好的共存をイデオロギー的に称揚する方針であるなら、多くのペンテコステ派グループは、すべての自然的霊の聖霊に対する服従を、環境の多元主義のための敵の創造に基盤をおく特有の文化として解釈するだろう²⁾。もしペンテコスタリズムが「シャーマニスティック」なキリスト教徒の運動の1タイプと理解されるならば、他の仕方で霊的世界を解釈することはできなくなる。砂漠は、時空を超えて自然と非干渉化する抽象的原理の象徴であり、同時に一神教を象徴する。それはすべての自然的霊を神に従わせることを追求しつつそれに限界づけられる。ペンテコスタリズムにおいて、自然の神々は聖霊によって打ち負かされるべき邪悪として再解釈されているのである。

参考文献

- ALMEIDA, Ronaldo.
2009 *A Igreja Universal e seus demônios*. São Paulo: Terceiro Nome.
- ARAKAKI, Ushi
in press Becoming Brazilian in Japan: Umbanda and Ethnocultural Identity in Transnational Times. In Quero, Hugo C., and Rafael Shoji, *Transnational Faiths: Latin-American Religions in Japan*, Surrey, UK: Ashgate.
- CHESSNUT, R. A.
2003 *Competitive Spirits: Latin America's New Religious Economy*. New York: Oxford University Press.
- FRESTON, P. C.
1999 The Universal Church of the Kingdom of God in Europe. *Lusotopie* 1: 383–404.
- 2001 The transnationalisation of Brazilian Pentecostalism. The Universal Church of the Kingdom of God. In Corten, Andre and Ruth Fratani-Marshall, eds. *Between Babel and Pentecostalism. Transnational Pentecostalism in Africa and Latin America*, 196–215. London, Hurst & Company.
- НАРДАГРЕ, Хелен
1984 *Lay Buddhism in Contemporary Japan: Reiyūkai Kyōdan*. Princeton: Princeton University Press.
- НІГУСНІ, Н.
2006 Brazilian Migration to Japan: Trends, Modalities and Impact. Paper Given to the UN Expert Group Meeting on International Migration and Development in Latin America and the Caribbean, Mexico City.
- LINGER, D.
2001 *No One Home*. Stanford: Stanford University Press.

- MAEYAMA, Takashi
 1972 Ancestor, Emperor, and Immigrant: Religion and Group Identification of the Japanese in Rural Brazil (1908–1950). *Journal of Inter-American Studies and World Affairs* 14(2): 151–82.
 1997 異邦に「日本」を祀る—ブラジル日本人の宗教生活の考察— [Worshipping “Japan” in a Foreign Country: The Religion of Brazilian Japanese and Ethnicity]. Tokyo: Ochanomizu Shobo.
- MARTIN, D.
 2002 *Pentecostalism: The World Their Parish*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- MATSUE, R. Y.
 2006 The Religious Activities among Japanese-Brazilian Dual Diaspora in Japan. In Pratap Kumar. (Org.), *Religious Pluralism in the Diaspora*, 121–46, Leiden: Brill.
- MORI, Koichi
 1998 Processo de ‘Amarelamento’ das Tradicionais Religiões Brasileiras de Posseção: Mundo Religioso de uma Okinawana. *Estudos Japoneses* 18: 57–76.
- MULLINS, Mark
 1998 *Christianity Made in Japan: A Study of Indigenous Movements*. Honolulu: University of Hawaii Press. (『インディアン・ブーン』 R. 『メソジュー・イン・シヤパンのキリスト教』 高崎恵訳 ‘トランスビューター’ 二〇〇五年)
- OBYESEKERE, Gananath
 2002 *Imagining Karma: Ethical Transformation in Amerindian, Buddhist, and Greek Rebirth*. Berkeley: University of California Press
- ORO, A. P.
 2003 Neopentecostalismo: dinheiro e magia. *Anuario Antropologia Social y Cultural En Uruguay, 2002–2003*, Montevideo, 205–14.
 2004 The Brazilian Religious Presence Abroad: The Case of the Universal Church of the Kingdom of God. *Advanced Studies*

- 18 (52): 139–55.
- 2006 Neopentecostalismo macumbeyro. *Revista USP* 68: 319–32.
- PARK, Chris
1994 *Sacred Worlds: An Introduction to Geography and Religion*. New York: Routledge.
- PIERUCCI, A. F. and R. PRANDI
1996 *A Realidade Social das Religiões no Brasil*. São Paulo: Hucitec.
- ROTH, J. H.
2002 *Brokered Homeland: Japanese-Brazilian Migrants in Japan*. New York: Cornell University Press.
- SHOJI, Rafael
2003 Buddhism in Syncretic Shape: Lessons from Shingon in Brazil. *Journal of Global Buddhism* 4: 70–107.
2008 Religiões entre os brasileiros no Japão: Pentecostalismo Decasségui e Redefinição Étnica. *REVER (PUCSP)* 8: 46–85.
- SMITH, Robert John
1974 *Ancestor Worship in Contemporary Japan*. Stanford: Stanford University Press.
- STARK, R.
1987 How New Religions Succeed: A Theoretical Model. In David G. Bromley and Phillip E. Hammond, eds., *The Future of New Religious Movements*, 11–29. Macon, GA: Mercer University Press.
- TSUDA, T.
2003 *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese-Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press.
- VIVEIROS DE CASTRO, Eduardo
1998 Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 4(3): 469–88.
- YANAGITA, Kunio 葉田國時
1970 *About Our Ancestors: The Japanese Family System*. New York: Greenwood Press [originally published 1946].

Rafael Shoji は Leibniz University (Hannover, Germany) で博士を取得し、Pontifical University of Sao Paulo の「東洋宗教研究所」(Center for the Study of Oriental Religions, CERAI) において研究所員を務めている。ブラジルにおける日本系宗教、日系ブラジル文化、仏教とキリスト教の比較研究についての論文を執筆している。本稿は日本国際交流基金と南山大学からの援助で行われた研究に基づいている。

- ① マクンバとは、「黒い」魔術全般を指すブラジルの用語である。当初はこの語はネガティブな意味で使われてはいなかった。この言葉は古来のアフリカの楽器名に由来するが、ブラジルでこの語は次第に魔術に用いられるようになった。通常は、愛情ゆえの、あるいは誰かを傷つけようとするためのものであり、とくにアフリカ系ブラジル人の神々(とくにエクサス)に対して、ときに動物のいけにえを含む供物を捧げるものである。
- ② アラカキは二〇〇二年から二〇一〇年にかけて日本におけるアフリカ系ブラジル人の宗教について広汎な調査を実施し、日本の十箇所のウンバンダ・センターの周辺に散在する信者の数を四五〇人と見積もっている(アラカキ二〇一二年)。
- ③ 詳細については、Shoji (二〇〇八年) を参照。
- ④ 理念型としての「日系ブラジル人」と「在日ブラジル人」の違いを強調しておくことは重要である。日系ブラジル人は日本人の祖先をもつが、文化・言語・国籍の点では主にブラジル人である。在日ブラジル人はブラジル人の祖先をもつが、生来の社会的環境としては日本の言語と文化をもつ。構造上の類似点や実際上の混合はあるものの、確かに諸要素の配列はここでの結果に変化をもたらしており、新しく現れた若い「在日ブラジル人」は、急速に日本社会におけるサブカルチャーを進展させている。
- ⑤ 先祖から引き継がれるカルマの概念のバリエーションと進展の概要については、ハーデカー(Hardacre, 一九八四年, 一二七―一四〇頁)を参照のこと。カルマについての一般的な議論はオベイエセケレ(Obeyesekere, 二〇〇二

年)を参照。

(6) 日本の民俗における先祖崇拜に関しては柳田(一九七〇年「一九四六年」)を参照。より現代的な見方についてはSmith(一九七四年)、その日本におけるキリスト教への接触についてはMullins(一九九八年、一二九〜一五五頁)を参照のこと。

多くの研究者が柳田を時代遅れと考えているが、本稿の文脈では示唆するところが大きい。というのも彼が生きたのがブラジルへの移民が盛んな時期であり、この時期の世界観を記述しているからである。柳田は近代化のプロセスで消失した多くの田舎における実践を記述しているが、それら実践のいくつかはブラジルの日本人移民のあいだで今日に至るまで残っている。

(7) Mullins(一九九八年、一二九〜一五五頁)が述べた、日本人キリスト教徒において先祖がもっていた役割と比較すると、日系ブラジル人キリスト教徒にとつて死者の世界のインパクトはわずかであった。しかし日本の新宗教スピリティズムとウンバンダに参加するニツケイには重要な影響を与えた。

(8) Slojfi(二〇〇三年)によるブラジルにおける真言の事例、および Mori(一九九八年)によるブラジルにおけるウンバンダと結合した沖繩シャーマニズムの事例を参照のこと。

(9) この世における利益の追求は、疑いなく日本人とブラジル人が分けて持つひとつの重要な特徴である。宗教の実際的な証明の可能性は、宗教的実践と霊的世界の介在によつて利益を得ることが可能であることを意味する。防護、健康、経済的ないし家族の問題解決は、霊的世界とのやり取りを通じて可能になると考えられているのだ。これは必ずしも一次的に現実主義者か魔術的かを判断することを意味しない。それは倫理やこれらの目標を達成する可能性を信じることによつて、必要なことを達成する状況の創造を追求する宗教的実践を含んでいる。この意味で日本の大衆的な宗教性は、そのおもな特徴においては宗教の重要な機能としてブラジル人が理解するものからそう隔たったものではない。ほとんどのブラジル人が宗教を実践するときは問題の解決を探し求めている。現世や多様な信念の融和における利益の獲得の実際的な確証は、多くの国における魔術やシンクレティズムとして軽蔑的な仕方では頻繁に分析されるが、日本とブラジルいずれにおいても肯定的または中立的なものとして提示され

一般に理解されている。

⑩ とくに一九九〇年代後半にピークを迎えた。日本における臨時雇用の受容増加とブラジルにおける高いインフレと経済危機の時期に重なっている。

⑪ Higuchi (二〇〇六年) が報告したように、最近移住したブラジル人は、請負人をとまなう臨時雇用契約を行なう。それはしばしば職場移転や勤務変更を意味した。変動する需要と労働者不足に際して労働力を供給する「ジャストインタイム」を提供するシステムを維持するなかで、このシステムは経済危機においてデカセギを非常に不安定な状況に置いた。依然として合法的移住は形式的な雇用、資格のための資金提供、社会扶助、言語の熟達、そして子供のための日本の学校での学習の機会を提供している。

⑫ UCKG はリオデジャネイロの北部においてエディール・マセド牧師により一九七七年に設立された。エディール・マセドはペンテコスタリズムに改宗する以前、カトリシズムとアフリカ系ブラジル人の宗教を実践していた。彼はロミルド・リペイロ・ソアレス (R. R. ソアレス) とともに UCKG を設立したが、彼はのちにユニバーサル・チャーチを離れ、インターナショナル・チャーチ・オブ・グレイスを設立した。ウェブサイトによれば、普遍教会は現在約一八〇カ国に存在している。今日 UCKG はブラジルにおいて約一万三千の寺院をもち、彼ら自身の政党も持っている (Partido Republicano Brasileiro 「ブラジル共和党」)。さらにまた、レデ・レコードという二つ目に大きなテレビ・ネットワークを持っている。これは二四時間のニュース・チャンネルがある。

⑬ もしユニバーサル・チャーチ・オブ・ザ・キングダム・オブ・ゴッドがグローバルな野心を、それ自身の名称やブラジルにおけるニュースレターのタイトル (雑誌のタイトル「フォルハ・ウニヴェルサル」は大雑把に「ユニバーサル・ニュース」と訳することができる) において示したなら、日本において「ブラジル・タイムス」はメインの情報チャンネルとしてエスニック・コミュニティに供給することを試みるだろう。その宗教的プロパガンダのほかに、ブラジル人のニュースと文化的主題はデカセギに向けて強調された。ブラジリアン・タイムスはほとんどすべての商店で無料でブラジル人に供給され、二〇〇八年には四万五千部の発行部数があった。二〇一二年には、おそらく多くのデカセギが帰国したことによって、供給部数は三万に減少した。

- ⑭ 逐語訳は「(荷)おろし」となる。大まかに言ってそれは悪霊を「おろす」ことを意味する。悪霊は敬虔な信者の生活に悪い影響をもたらす。
- ⑮ Almeida (二〇〇九年) によるブラジルにおけるこれらの悪魔祓いの集会についてのエスノグラフィックな記述を参照のこと。
- ⑯ 大まかな訳は「消去」「もとに戻す」となる。この儀礼は「デスカレゴ」の儀礼に与えられたもうひとつの名である。一般的な意味は、魔術や呪いを解く儀礼ということになる。
- ⑰ 「トランカ・ルアス」(逐語訳で言う「鍵」と「街路」を組み合わせた言葉)は、悪魔的実在として長い間考えられてきたアフリカ系ブラジリアンの存在であり、Eukurasに属している。この実在はとりわけ人々の生活の道を「開ける」ないし「閉める」力を持つものと理解されている。
- ⑱ 「エンコスト」(大雑把に訳すと「触れる」であり、適切な名称として用いられる)は、聖者を呪いその邪悪をもたらす死んだ人間の霊を意味する。それは悪の霊的神々、ないし死んだあと肉体を離れ明確な目的地がない霊となりうる。「エンコスト」の用語は、ネガティブな力(肉体を離れた霊)が呪いとして人間にとどまるといふ、生きた人間の認識に関連している。
- ⑲ Mullins (一九九八年〔二〇〇五年〕を参照のこと。Hayashi Minoru にもとづく彼の分析によれば、「明白に、キリスト教徒の「シャーマニズム」のみが新宗教のシャーマニズムと競合することができる」(Mullins, 一九九八年(二〇〇五年)、一八一頁)が、しかし一方で、彼が同じページで正しく述べているように、「ペンテコステ派のキリスト教は、西欧の教会と結びつけられるようなキリスト教の知的表現よりも、よく現在の社会的気候に「適合」しうる。しかしながらこの事実だけでは、日本のコンテクストにおける教会の成長を保証することはできない。土着的ペンテコステ派運動の衰退もそれを示している。」ブラジル人のペンテコステ派教会は今日エスニックな教会であり、著しい変化をまったく示していないのである。
- ⑳ ヴィヴェイロス・デ・カストロ(一九九八年)を参照のこと。アメリカ・インディアンの遠近法主義にもとづき、彼は土着的宗教がアメリカ大陸における(より一般的にはシャーマニズムにおける)自然と憑霊に基盤をもつて

いると議論している。そこにはマルチナチュラリズムがあり、それは同じ霊がさまざまな身体を占拠しているという事実に基づいているのである。ここでとりわけ私にとって興味深いのは、特定の地理的、自然的風景から、他の自然的風景に至る霊的世界の拡張である。

⑰ おそらくはひとつの自然と多くの文化を想定する一神教に基づいた西欧の伝統により、自然の役割はあらゆる移植の研究においてしばしば低く見積もられてきた。これらの要素はしばしば文化変容に基づき調査において、または宗教の地理学のデイシプリンが宗教に対する空間と自然の重要性を切り離すなどして無視されてきた (Park 「一九九四年」の例を見よ)。

⑱ ヴィヴェイロス・デ・カストロは、呪術的宇宙的方法としてのシャーマニズムはマルチナチュラリズムを基盤としていると提言しているが、ペンテコスタリズムの場合、自然世界は否定的な様式に解釈されている。

(長澤壮平訳)